

## パターン・プラクティスについて

文学研究科英語コミュニケーション専攻博士後期課程3年  
日塔 悦夫

### はじめに

本稿の目的はパターン・プラクティスと英語5文型との関係を明らかにすることである。すなわちパターン・プラクティスがどのように我が国の5文型に影響を与えたのかを分析する。パターン・プラクティスはアメリカ構造主義言語学のオーラル・アプローチから唱えられた英語の教授法である。

本稿ではパターン・プラクティスがC. T. Onions と細江逸記の「5文型」そしてA. S. Hornby の「25文型」を普及させた教育活動であると把握する。我が国においてパターン・プラクティスは「文型練習」とされ、「5文型」と「25文型」が大いに利用された。本稿は次のような順序でパターン・プラクティスを分析する。

「Ⅰ パターン・プラクティスに関する先行研究」では、これまでパターン・プラクティスと5文型とがどのように位置づけられていたのかを整理する。「Ⅱ パターン・プラクティスの概観」では、我が国におけるパターン・プラクティスの教育活動がどのように始まり、そして終焉したのかを論述する。「Ⅲ パターン・プラクティスと5文型の関係」では、パターン・プラクティスによって「5文型」と「25文型」はその意義が理解され、頻繁に使用されるようになったと判断する。パターン・プラクティスは学習者に単純な文を複雑なものへと導く教育活動であった。本稿はパターン・プラクティスの意義を分析する。

### I パターン・プラクティスに関する先行研究

ここでは伊藤健三の『文法・文型の指導』(1970〔昭和45〕)<sup>1</sup>を取り上げる。伊藤は『文法・文型の指導』でアメリカ構造主義言語学の‘pattern’を次のように述べている。Onions、Hornbyの「文型」は「文」だけの「型」を指しているのに対して、アメリカ構造主義言語学のC. C. Fries、R. Lado等の‘pattern’は英語の様々な発話面、文法面における

型を意味している、と説明した。Fries、Ladoは*English Sentence Patterns* (1957 [昭和32])<sup>2</sup>でそのタイトルにSentence Patterns を使用し英語の広い範囲の活用例を示した。そして一つの具体例としてFriesは*The Structure of English*<sup>3</sup>で「文型」を平叙文、疑問文そして命令文のような「文の種類」という意味でも使っている。

したがって伊藤はFries、Lado等の‘pattern’が広い範囲の基本的な音調、発話、文などで、その使用する反復練習がパターン・プラクティスであると定義した。よって伊藤は広い範囲の‘pattern’つまりFriesとLadoのものと、狭い範囲の「文型」つまりOnionsと細江のものとを区別した。

しかし、本稿はFries、Lado等の‘pattern’がOnions、細江の「5文型」そしてHornbyの「25文型」とは根底において同じであると位置づける。そしてパターン・プラクティスが単純化された「5文型」と「25文型」を実用的に使用できる教育活動であるとした。Fries、LadoとOnions、細江、そしてHornbyとの違いは研究方向によるものである、すなわちOnions、細江そしてHornbyは文の単純化を図った結果、「5文型」と「25文型」に到達した、一方でFries、Lado等のはそれらの様々な使い方をつまり日常的に使えることを目指した。

このように本稿はFries、LadoとOnions、細江の「文型」が同じとする立場で議論を進める。

## Ⅱ パターン・プラクティスの概観

パターン・プラクティスは戦後、Friesらによって広められた英語の学習方法である。Friesは1956（昭和31）年に来日してパターン・プラクティスを我が国へ広めた。我が国では本田実浄が*Pattern Practice* (1960 [昭和35])<sup>4</sup>で、山家保（やんべたもつ）が『英語の文型』(1961 [昭和36])<sup>5</sup>で、パターン・プラクティスを紹介した。このような状況から1950（昭和25）年代後半からパターン・プラクティスの学習が教室で盛んになされた。

これは戦前の伝統的教授法であるTranslation method（訳読式教授法）またはGrammar-translation method（文法・訳読式教授法）に対して口頭面から英語を学ぶ姿勢を示したもので、新しい英語教育の出発点を象徴する英語の総合的な教授法であり学習方法であった。オーラル・アプローチとパターン・プラクティスは我が国で一大ブームとなった。

パターン・プラクティスは「文型練習」として全国に広がった。オーラル・アプローチは戦前パーマーによって主張されたオーラル・メソッドと本質的に同じものであるが、普及度が部分的であったオーラル・メソッドに対してオーラル・アプローチは全国的であった。すなわちオーラル・アプローチはオーラル・メソッドを発展させた。

## Ⅱ-1 パターン・プラクティスの教授法

オーラル・アプローチは1940（昭和15）年代から1950（昭和25）年代にアメリカ構造主義言語学のBloomfieldと行動主義心理学のSkinnerの理論を背景に提唱され実践された。その実践はミシガン大学のFriesとLadoが中心となった。オーラル・アプローチは学習の対象となる言語特有の構造と規則体系の学習を重視し、そして心理学の概念、刺激と反応を取り入れた練習を重要とした。さらに書き言葉より話し言葉を、言語の文化的背景の習得を、またコミュニケーション・会話の口頭練習を重視した。

オーラル・アプローチの中心がパターン・プラクティスであった。パターン・プラクティスは英語における基本的な音声と構造を体系的に反復練習して、どのような場面にもそれらが無意識・自動的に運用できる言語習慣の養成を目標にした。このことからまたこれは短期間で外国語を習得する軍隊式学習法とも呼ばれた。

言語項目の選び方や並べ方は、単純なものから複雑なものへ、規則的なものから不規則なものへ、頻度の高いものから低いものへ、そして母国語と目標言語の差の小さいものから大きいものへとなる<sup>6</sup>。

パターン・プラクティスは発音、語彙、そして文法を総合的にそして体系的にした練習法で、これは科学的学習法とも称された。これは文の基本例を基にその一部の単語を言い換え、繰り返し練習することによって英語を習得しようとするものである。すなわちパターン・プラクティスは基本例の単語の置換作業、平叙文から疑問文へ、単文から重文へ、能動態から受動態などの転換作業、そして形容詞や副詞などを追加していく拡充作業を含んだ学習法である。具体例は以下の通りである。

### （1）置換作業

It is a cat.

↓ a dog

↓ a cow

↓ a bird

### （2）転換作業

Is it a cat?

↓ What is it?

↓ Is it a cat or a dog?

↓ It is a cat, isn't it?

### (3) 拡充作業

It is a cat.

↓ big

It is a big cat.

↓ very

It is a very big cat.

(1) の置換作業は基本例である It is a cat. の a cat を次々に a dog、a cow、a bird などに換えていくもの。(2) の転換作業は基本となる一般疑問文の Is it a cat? を特殊疑問文の What is it?、選択疑問文の Is it a cat or a dog?、そして付加疑問文の It is a cat, isn't it? に書き換えていくもの。そして (3) の拡充作業は基本例である It is a cat. の a cat に形容詞である big を加えて It is a big cat. にする、それから副詞の very を加えて It is a very big cat. にするものである<sup>7</sup>。

このようにパターン・プラクティスは単純な文から複雑な文へ変換する能力を養おうとする。ここでの基本例は単純な平叙文で、それを「5文型」と考えれば、パターン・プラクティスは「5文型」を複雑な文へとする教授法になる。

## II-2 我が国におけるパターン・プラクティスの歴史

1950 (昭和25) 年代後半からパターン・プラクティスの学習が我が国で盛んになされた。しかし1960 (昭和35) 年代後半になるとパターン・プラクティスに疑問が出されるようになった。下村勇三郎は「サマープログラムがスタートして10年くらいがオーラル・アプローチのピークでした」、<sup>8</sup> と述べている。このことからオーラル・アプローチとパターン・プラクティスのピークは1967 (昭42) 年であると考えられる。

この発言を踏まえて我が国におけるパターン・プラクティスの活動を三つの時期に分けることにする。

第一期は上昇期で、1956 (昭和31) 年から1967 (昭和42) 年までとする。この時期は日本英語教育委員会 (The English Language Exploratory Committee 略称 ELEC) が創設された時からオーラル・アプローチの提唱者である Fries の死去までである。

第二期は下降期で、1967 (昭和42) 年から1975 (昭和50) 年までとする。この時期は Fries の死去から山家保が ELEC を去る時までである。

第三期は終焉期で、1975 (昭和50) 年以降とする。この時期は山家が1975 (昭和50) 年に ELEC から離れ、これは同時に事実上ここでオーラル・アプローチに基づくパターン・プラクティスは終焉した、しかし5文型の研究が進んだ時期でもある。

## II-2-(i) 第一期 (1956〔昭和31〕年から1967〔昭和42〕年まで)

1956 (昭31) 年に日本英語教育委員会 (ELEC) が創設された。これはオーラル・アプローチとパターン・プラクティスを推進する機関で、そのための教材の開発、出版そして夏期講習会の開催を実行した。第一回のELEC夏期講習会・サマープログラムは1957 (昭和32) 年に東洋英和女学院短大で開催された<sup>9</sup>。

それから山家が1958 (昭和33) 年に日本英語教育委員会 (ELEC) に入った。山家はELECに入る前に宮城県の英語教育主事第一号に任命され、1951 (昭和26) 年から1952 (昭和27) 年までにミシガン大学で習得したオーラル・アプローチとパターン・プラクティスを宮城県の学校で実践した。彼の略歴は次の通りである。

図表1 山家保の略歴

1915(大正4)年	仙台市に生まれる
1932(昭和7)年	宮城県立仙台第二中等学校(現 宮城県立仙台第二高等学校)卒業
1936(昭和11)年	東京外国語学校(現 東京外国語大学)英語部文科卒業
1936(昭和11)年-1939(昭和14)年	鳥取県立鳥取商業学校教諭
1939(昭和14)年-1942(昭和17)年	福島県立相馬中等学校教諭
1942(昭和17)年-1945(昭和20)年	兵役 [2年10か月]
1946(昭和21)年-1952(昭和27)年	宮城県立仙台第二高等学校教諭
1951(昭和26)年-1952(昭和27)年	第3回ガリオア留学生としてミシガン大学留学
1952(昭和27)年-1957(昭和32)年	宮城県教育委員会指導主事
1958(昭和33)年-1975(昭和50)年	日本英語教育研究委員会(ELEC)主事、事務局長/財団法人英語教育協議会(ELEC)研究開発部長
1960(昭和35)年	テキサス大学で言語学夏期大学に参加
1972(昭和47)年-1977(昭和52)年	東京外国語大学外国語学部非常勤講師[英語科教育法]
1973(昭和48)年-1974(昭和49)年	熊本大学教育学部非常勤講師 [英語科教育法]
1975(昭和50)年-1986(昭和61)年	東横学園女子短期大学教授
1986(昭和61)年-1991(平成3)年	東横学園女子短期大学客員教授
1995(平成7)年	洗礼を受ける
2002(平成14)年	逝去 [享年87歳]

山家保先生記念論集刊行委員会2005 (平成17). 『あえて問う英語教育の原点とは』 p. 329、開拓社、東京。

山家は1958 (昭33) 年から1975 (昭50) 年までELECで主事、事務局長、研究開発部長を務めた。次は山家がELECに入る前のオーラル・アプローチとパターン・プラクティスに関する報告である。

図表 2-1 1954 (昭和29) 年度研究指定校 (栗原郡若柳町立若柳中学校)

第1学年	Lesson 1	lesson 2	Lesson 3
平均点	6.1点	7.4点	8.0点
第2学年	Lesson 1	lesson 2	Lesson 3
平均点	5.3点	6.4点	7.0点

毎時間実施、5分間のwritten test の成績、各課ごとに平均したもの、10点満点

図表 2-2 1955 (昭和30) 年度研究指定校 (石巻市立湊中学校)

第1学年 (285名中平均90点以上のもの)		
第2学期前半	第2学期後半	第3学期
29名 (10%)	101名 (35%)	139名 (50%)

図表 2-3 1956 (昭和31) 年度研究指定校 (柴田郡柴田町立船岡中学校)

第1学年 (367名中平均90点以上のもの)			
	4月	9月	12月
	20.7%	24.1%	47.6%
-----			
第2学年A組 (59名)			
	4月	9月	12月
平均 90 点以上	10名	21名	46名
平均 59 点以上	17名	6名	2名
-----			
第3学年D組 (46名)			
	4月	9月	12月
平均 90 点以上	1名	6名	24名
平均 59 点以上	14名	2名	4名

山家保1959 (昭34). 「オーラル アプローチ」小川芳男・山家保・研究社編集部『英語教授法展望』(英語科ハンドブック第1巻) p. 240-p. 241、研究社、東京。

このように山家の報告は英語の成績がオーラル・アプローチとパターン・プラクティスの実践によって向上したことを示した。

さらに1962（昭37）年にオーラル・アプローチとパターン・プラクティスを実践する中学校用英語教科書の*New Approach to English*が大修館で刊行された。それから1963（昭38）年に日本英語教育委員会が財団法人としての英語教育協議会（The English Language Education Council, Inc.）となった。略称は同じELECで日本の英語教育の質的向上に資することを目的とした。さらに『大修館英語教育シリーズ』全20巻が出版された。このときオーラル・アプローチとパターン・プラクティスが全盛を極めた。これらによって言語科学、言語分析、アメリカの言語学、英語の発音、語彙、音素、教育史、教育評価、日英語比較、文化など言語に関する総合的な研究が紹介された。これはまさにアメリカ構造主義言語学の画期的な成果であった。

アメリカ構造主義言語学の応用面における二大用語はオーラル・アプローチとパターン・プラクティスである。パターン・プラクティスは「文型練習」という簡単な呼び名になったが、オーラル・アプローチ（Oral Approach）の訳は難しかったようだ。今日ではそのままで使うことになった。

山家はオーラルが学生の言語材料をマスターする上での目標で、アプローチはその目標への到達を意味している、と定義した<sup>10</sup>。しかし、山家はその意味を述べるだけで、日本語訳は示さなかった。そこで次のような訳が示された。

オーラル・アプローチの訳語について大田朗と安井稔はそれを「口頭教授法」、左右田實は「口頭入門教授法」<sup>11</sup>、勇康雄は左右田實の「口頭入門教授法」を支持<sup>12</sup>、池上勝雅は「口頭学習法」または「口頭入門教育法」を提案した<sup>13</sup>が、結局決まらずそのままオーラル・アプローチになった。これはパターン・プラクティスの呼び方が「型練習」でなく「文型練習」と意識され、そして広く定着したのと大きな違いとなった。

## II-2-(ii) 第二期（1967〔昭和42〕年から1975〔昭和50〕年まで）

1967（昭和42）年ごろからオーラル・アプローチの支持者がパターン・プラクティスへの批判をするようになった。例えば羽鳥博愛は中学校でパターン・プラクティスを実行し、大学の教官になった時にその効果を評価した<sup>14</sup>。しかしのちに羽鳥はパターン・プラクティスが無意識の機械的な訓練で、生徒の英語に対する意欲を喪失させ、教育的にも効果がないとも主張しはじめた<sup>15</sup>。

それにオーラル・アプローチの提唱者であるFriesが死去したことから、アメリカの構造主義言語学の勢力も衰え、それと反対にチョムスキーの支持者が増加した。さらに大修館の中学校用英語教科書である*New Approach to English*が思うように使用校が増加しなかった

ために、それは1972（昭和47）年3月に絶版となった<sup>16</sup>。

そして山家が1975（昭和50）年にELECを離れことによってオーラル・アプローチのパターン・プラクティスは終焉することになった。小篠敏明は1968（昭和43）年に、この現象を「パタン、パタンの足音はだんだん遠のいてきこえなくなってきた」<sup>17</sup>、と述べている。

しかしこの間、機関紙である『BULLETIN』、『英語展望』で生成文法の紹介、さらに新しい教育法、それに対する批判が繰り返された。主要な論文は以下である。

図表3 機関紙『BULLETIN』、『英語展望』内の論争

著者	タイトル	年月	号
生成文法から			
大田朗	変形文法の理論と応用	1968（昭和43）-3	No. 23
井上和子	生成変形文法概論	1968（昭和43）-冬	No. 28
[座談会]	変形文法と英語教育	1970（昭和45）-春	No. 29
-----			
新教育法から			
緒方勲	Pattern Practiceから Communication Practice	1974（昭和49）-夏	No. 46
渡辺益好	Pattern Practicから Communication Practice	1974（昭和49）-夏	No. 46
-----			
オーラル・アプローチから			
山家保	Transformationとその限界	1966（昭和41）-6	No. 18
山家保	英語教育法の変遷	1971（昭和46）-冬	No. 32

このような論争後にパターン・プラクティスという用語はほとんど使われなくなった。

しかしながら1960年代後半になるとパターン・プラクティスすなわち「文型練習」は「5文型」の研究を大いに進めた。大塚高信は『日本の英学100年』（1968〔昭和43〕）で「5文型」がOnionsと細江逸記ラインによって発展したと発表した。またOnionsの*An Advanced English Syntax*は安藤貞雄の翻訳で『高等英文法』（1969〔昭和44〕）として発行された。

## II-2-(iii) 第三期（1975〔昭和50〕年以降）

財団法人英語教育協議会（ELEC）はオーラル・アプローチの推進を試み、例えば1977（昭和52）年にオーラル・アプローチに関するアンケートによる実態調査を行った<sup>18</sup>が、オーラル・アプローチの復活はできなかった。そしてELECは広い範囲の英語教育機関に変身した。そしてパターン・プラクティスという用語が使われなくなったが、何人かの教育者は



雑誌の『英語教育』でオーラル・アプローチおよびパターン・プラクティスに一定の評価をあたえた。例えば、田中春美は文型練習の必要性を訴え<sup>19</sup>、また堀口俊一は文型練習の意味を検証した<sup>20</sup>。安藤貞雄ほかは基本文型の再考を促した<sup>21</sup>。そのほかに牧野力<sup>22</sup>、小林悦雄<sup>23</sup>も文型練習の役割を再分析した。

このようにパターン・プラクティスの意義は、5文型の使い方を具体的に普及させたことである。また5文型を実際に使えるようにし、Onions、細江の評価を高めた。したがって5文型自体の重要性はむしろこれ以後も増加したと言える。

### Ⅲ パターン・プラクティスと5文型の関係

#### Ⅲ-1 パターン・プラクティス＝文型練習

5文型は英語に代表的な五つの文を示し、それらを日本語に近い順に第1文型と第2文型、英語に代表的な第3文型そして最も日本語に遠い第4文型と第5文型とした。この方法はアメリカ構造主義言語学における母国語と目標言語の差の小さいものから大きいものへとする学習方法と一致した。5文型は我が国における英語学習者に大きく寄与した。これをさらに使えることを目的にしたのがパターン・プラクティスであった。

本田によると、「文部省の文型は、文型そのものについてのわれわれの考え方を啓発してくれる点はひじょうに多いけれども、それを直ちにわれわれの実際指導に結びつけるのには、さらにそれを具体化していかなければならない」<sup>24</sup>、と主張した。また伊藤はFriesなどのpatternとOnions、Hornbyの文型とは異なり、また学習指導要領の文型と区別するために、Friesなどのpatternを文型と言わずにpattern（型）とした。

だが実際の中学校および高校では、文部省の学習指導要領に基づいて授業を進めていかなければならず、教科書にある基本文型を用いてプラクティスすなわち練習をすることになった。現実にはFriesが意図した様々な型のプラクティスより「文部省の文型」のプラクティスとなった。

5文型の方法がアメリカ構造主義言語学の学習方法と異なっているとも言えない。それで伊藤もその著書『文法・文型の指導』でFriesらのpatternを説明したあと、それと区別せずに「文部省の文型」練習へと自然に移行した。したがってパターン・プラクティスは文型練習となった。

#### Ⅲ-2 パターン・プラクティスの意義

本稿はこれまで本質的にFries、Lado等の‘pattern’とOnionsと細江の「5文型」が同

じであると証明してきた。パターン・プラクティスによってOnions と細江の「5文型」とHornby の「25文型」が複雑化になったのである。Onions、細江そしてHornby は文の単純化を図った結果、「5文型」と「25文型」に到達した、一方でFries、Lado等のはそれらの文型の実用化を目指したとも言える。この相違は研究方向によるものである、次にこの両者の違いを検証する。

### Ⅲ-3 Fries、Ladoの文型とOnions、細江の文型との対比

最初に、両者の違いを「疑問文の扱い」について、それから「短縮形と回答文の扱い」について、最後に「機能語と修飾語の重視」の点で検討する。

#### Ⅲ-3-(i) 疑問文の扱い

Lado とFries の具体例<sup>25</sup>は以下である。

- (1) a. The lesson IS interesting.
- b. IS the lesson interesting?

The lesson IS interesting. は第 2 文型のS+V+Cである。ここではIS のある平叙文の基本文型とISのある疑問文とが対比されている。このThe lesson IS interesting. からパターン・プラクティスの置換作業がなされる。名詞the lessonの置き換えは、例えばthe classまたはthe studentへとなり、次に形容詞の interesting が important や intelligent に置き換えられる。次に転換作業へと進む、ISが文中から文頭に移動することによって平叙文から疑問文へ転換され、ここで語順の違いが対比される。

Onions、細江の文型とFries、Ladoの文型とで決定的な違いは疑問文の扱いである。Onions、細江の文型には疑問文は存在しない。彼らの研究対象は文の解剖による文要素の解明にあったために、疑問文を切り捨てたのである。一方で、LadoとFriesは平叙文から疑問文へと進めた。これを別の言い方にするとLadoとFriesはOnions、細江の平叙文S+V+Cから疑問文V+S+Cへ複雑化させたとも言える。疑問文を基本文に含めることはオーラル・アプローチおよび日常会話にとって当然のことである。

Hornbyの動詞型一覧には疑問文がないが、その例文には疑問文が示されている。Onions と細江の文型とHornbyの文型との違いは文の単純性にある。Onionsと細江の文型はHornbyの文型より単純性が求められたのである。

## Ⅲ-3-(ii) 短縮形と回答文の扱い

Lado と Friesが示した具体例<sup>26</sup>は以下である。

- (2) a. It's interesting.  
 b. You're busy.  
 c. I'm busy.

ここではIS、ARE、AMが短縮形になることを示している。これはオーラル・アプローチが当然、日常的な発話を念頭に置いているからである。他方、Onionsと細江の文型では短縮形が存在していない、なぜならば彼らは文を分解していたからである。むしろ彼らはそれらを分離し、明確に主語と動詞の区別を行った。

次は疑問文とそれに対する回答文の例<sup>27</sup>である。

- (3) a. Is the lesson interesting?  
 b. Yes, it is.

ここでは疑問文に対する短文の回答が示されている。オーラル・アプローチには疑問文に対する回答が必須である。Onions、細江の文型には疑問文が入っていないため回答文も存在していない。応答語ももちろん使用されていない。

## Ⅲ-3-(iii) 機能語と修飾語の重視

Friesは*The Structure of English*<sup>28</sup>で機能語の多用性を指摘した。英語の語彙には内容語と機能語に分けられ、内容語は名詞、動詞、形容詞、副詞を指しそれ自身がはっきりとした意味をもっている語である、それに対して機能語は主に文法関係を示す役割を持ち、冠詞、代名詞、前置詞、接続詞、助動詞、関係詞がこれに当たる。会話では機能語も重要視される。例えば、LadoとFriesの基本例<sup>29</sup>には次がある。

- (4) a. I'm A student.

ここでは機能語である冠詞のAが強調された。一方細江は主語、動詞、目的語そして補語を強調するために機能語を括弧でくくる表記法を採った。細江の第2文型の例文<sup>30</sup>では、

- (5) a. James has become (a) (famous) soldier.  
b. He looks (an) (honest) boy.

となっている。

冠詞の (a) と (an)、それに限定用法である形容詞の (famous) と (honest) は括弧でくくられて、内容語で名詞補語の soldier と boy を引き立たせている。また細江の次の例<sup>31</sup>を見てみよう。

- (6) a. (His) father died (yesterday).  
b. (The) man laughed (merrily).

これは第1文型の例で、所有代名詞、定冠詞そして副詞も括弧でくくられている。

このように修飾語、機能語の多くを括弧でくくるやり方は Onions にはなく、細江だけの手法である。Onions より細江の方が文要素を引き立たせようとしたことが分かる。

## おわりに

これまでパターン・プラクティスと5文型の関係を考察してきた。パターン・プラクティスに様々な問題があったが、その意義は5文型を実際に使えるようにしたことである。5文型自体は文の分解によって見出された単純な文で、それからの展開である複雑な文について Onions と細江逸記は何も示唆をしなかった。

パターン・プラクティスは5文型の存在を多くの人に知らせ、そして5文型の研究を促した。我が国ですでに5文型が存在していたことが、オーラル・アプローチの運動を強く促進した。もしオーラル・アプローチの運動がなかったならば5文型の研究も進まなかったかもしれない。

これまでを要約すると「I パターン・プラクティスに関する先行研究」では、伊藤健三の研究を取り上げた。伊藤はFries、Lado等の‘pattern’とOnions、細江、Hornbyの「文型」とで相違があると主張した、しかし本稿は本質的にそれらは同じであることを実証してきた。

「II パターン・プラクティスの概観」では、財団法人英語教育協議会 (ELEC) がオーラル・アプローチの重要な推進機関であったことを見てきた。そしてパターン・プラクティスが5文型を土台にして出発、発展、そして終焉した過程を検証した。この過程はパターン・プラクティスと5文型が共同で英語教育の発展を目指したことになる。

「III パターン・プラクティスと5文型の関係」では、パターン・プラクティスの提唱者で

ある Friesと Lado の主張とOnionsと細江の見解を対比させ、Onionsと細江の「5文型」は文の分解から誕生したことを、それがパターン・プラクティスの出発点になったことを位置づけた。5文型はパターン・プラクティスによってその意義が理解され、頻繁に使用されるようになった。

- <sup>1</sup> 伊藤健三1970 (昭和45). 『文法・文型の指導』 p. 12-p. 44、研究社、東京。
- <sup>2</sup> Lado, Robert & Charles C. Fries 1964 (昭和39). *English Sentence Pattern*, The University of Michigan, U. S. A.
- <sup>3</sup> Fries, Charles C. 1959 (昭和34). *The Structure of English* p. 143-p. 145、Longmans、London. 大沢銀作訳1985 (昭和60). 『英語の構造』 p. 158-p. 160、文化書房博文社、東京。
- <sup>4</sup> 本田実浄1962 (昭和37). *Pattern Practice* 大修館、東京。本稿は第三版を利用した。
- <sup>5</sup> 編者・ミシガン大学英語研究所、訳注者・山家保1961 (昭和36). 『英語の文型』、大修館、東京。
- <sup>6</sup> 大関篤英ほか1988 (昭和63). 『英語科教育法』 p. 30-p. 36、金星堂、東京。
- <sup>7</sup> 本田実浄1962 (昭和37). *Pattern Practice* p. 62、大修館、東京。
- <sup>8</sup> 大修館2006 (平成18)-夏. 「座談会：ELECと日本の英語教育の50年 教授法とテストと教員研修」『英語展望』第113号、p. 33、大修館、東京。
- <sup>9</sup> 大修館1966 (昭和41)-11. 「ELEC10年史」第19号、p. 26、大修館、東京。
- <sup>10</sup> 山家保1959 (昭和34)-3. 「Oral Approachをめぐる」『英語教育』第7巻第12号、p. 624-p. 626、大修館、東京。
- <sup>11</sup> 左右田實1958 (昭和33)-2. 「Oral Approachの訳語」『英語教育』第6巻第11号、p. 490、大修館、東京。
- <sup>12</sup> 勇康雄1958 (昭和33)-3. 「Oral Approachの要点」『英語教育』第6巻第12号、p. 534、p. 571、大修館、東京。
- <sup>13</sup> 池上勝雅1958 (昭和33)-11. 「Oral Approachの訳語について」『英語教育』第7巻第8号、p. 444、大修館、東京。
- <sup>14</sup> 羽鳥博愛1963 (昭和38)-3. 「パターン・プラクティスの理論と実際」『東京学芸大学研究報告』第14集第8分冊、p. 69-p. 78。
- <sup>15</sup> 羽鳥博愛1996 (平成8). 『国際化の中の英語教育』 p. 16-p. 18、三省堂、東京。
- <sup>16</sup> ELEC出版部 1971 (昭和46). 「[座談会] New Approach to English」『英語展望』第35号、p. 14-p. 18、p. 20、ELEC出版部、東京。
- <sup>17</sup> 小篠敏明1968 (昭和43)-12. 「パターン・プラクティスの成立」『広島大学教育学部紀要』 p. 139-p. 148、第1部-17。
- <sup>18</sup> ELEC教材・教授法グループ1977 (昭和52)-Spring. 「Oral Approach に関する実態調査」『英語展望』第57号、p. 36-p. 47、p. 52、大修館、東京。
- <sup>19</sup> 田中春美1978 (昭和53)-10. 「それでも文型練習は必要である — Pattern practice の功罪と再評価 —」『英語教育』第27巻第8号、p. 28-p. 31、大修館、東京。
- <sup>20</sup> 堀口俊一1980 (昭和55)-9. 「文型練習の今日的意味」『英語教育』増刊号、p. 58-p. 60、大修館、東京。
- <sup>21</sup> 安藤貞雄ほか1983 (昭和58)-5. 「基本文型を考える」『英語教育』第32巻第2号、p. 16-p. 22、大修館、東京。

- <sup>22</sup> 牧野力1974 (昭和49)-1. 「文型練習の活性化について (試論)」『教養諸学研究』第43・44・45合併号、p. 75-p. 92、早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会、東京。
- <sup>23</sup> 小林悦雄1979 (昭和54)-1. 「高校初期における文型練習と語い指導について」『帝京大学文学部紀要』第10号、p. 309-p. 342。
- <sup>24</sup> 本田実浄1962 (昭和37). *Pattern Practice* p. 119、大修館、東京。
- <sup>25</sup> Lado, Robert & Charles C. Fries 1964 (昭和39). *English Sentence Pattern* p. 1、The University of Michigan, U. S. A.
- <sup>26</sup> Lado, Robert & Charles C. Fries 1964 (昭和39). *English Sentence Pattern* p. 4、The University of Michigan, U. S. A.
- <sup>27</sup> Lado, Robert & Charles C. Fries 1964 (昭和39). *English Sentence Pattern* p. 6、The University of Michigan, U. S. A.
- <sup>28</sup> Fries, Charles C. 1959 (昭和34). *The Structure of English* p. 87-p. 109、Longmans、London.  
大沢銀作訳1985 (昭和60). 『英語の構造』 p. 91-p. 113、文化書房博文社、東京。
- <sup>29</sup> Lado, Robert & Charles C. Fries 1964 (昭和39). *English Sentence Pattern* p. 9、The University of Michigan, U. S. A.
- <sup>30</sup> 細江逸記1966 (昭和41). 『英文法汎論』 p. 36、篠崎書院、東京。
- <sup>31</sup> 細江逸記1966 (昭和41). 『英文法汎論』 p. 34、篠崎書院、東京。

## On Pattern Practice

NITTO, Etsuo

The purpose of this study is to examine the relationship between pattern practice and the notion of five sentence patterns. The pattern practice is a form of repetition drills by oral approach. The oral approach was introduced in Japan by American linguists, such as C. C. Fries and R. Lado after World War II. In the oral approach the aim is learning the basic language material orally.

American structuralists analyzed the English language and its major grammatical structures into patterns, which could be used in oral practice. According to the oral approach, students had to start from simple forms to complex ones.

There are a few ways of the pattern practice. They are substitution, conversion and expansion. The substitution is the practice of exchanging the words. The conversion is the drill of changing the statement into the negation, the question and so on. The expansion is the action of expanding the sentence, using adjectives and adverbs.

In the 1960s, the oral approach and the pattern practice spread rapidly and widely in junior and senior high schools. In Japan we had had simple types of the English sentence, which were called the notion of five sentence patterns. At that time, English teachers blended the notion and the idea of pattern practice together. And then the teachers used the five sentence patterns very much to start the pattern practice.

That is why pattern practice lessons were held everywhere in Japan. However, in the 1970s after Fries, who was the advocator of the oral approach, died, people did not use the term because it was thought that the oral approach did not work in the classroom between the teachers and the students.

Most people today have not heard much about the oral approach and the pattern practice in English learning. However without them, the five sentence pattern theory would not have advanced. C. T. Onions and Itsuki Hosoe did not explain the process from simple sentence into complex one.

Pattern practices have played an important role in the development of the theory of five sentence patterns.